

研究タイトル：

文学に描かれた〈怒り〉とその表出

氏名：	栗山 雄佑 / KURIYAMA yusuke	E-mail：	y-kuriyama@sasebo.ac.jp
職名：	講師	学位：	博士(文学)
所属学会・協会：	日本近代文学会, 昭和文学会, 日本社会文学会, 立命館大学日本文学会, 植民地文化学会		
キーワード：	日本近現代文学, 沖縄文学, ジェンダー・スタディーズ, クィア・スタディーズ		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> ・日本近現代文学 ・マイノリティをめぐる文学表現 ・文章表現法 		



研究内容： 日本近現代文学における〈怒り〉とその表出の方策

●「怒りの感情と文学」をキーワードに、近現代日本文学に描かれた様々な暴力の様相とそれへの怒りの感情の表出、抑圧状況への抵抗、攪乱を行うための文学の可能性について研究を行っている。

主たる研究は、沖縄戦から現代に至る歴史の中で発生した、幾多の暴力の様相を描き出している沖縄の文学活動に関するものである。特に、〈沖縄の怒り〉といった言葉で発露される沖縄の主体性について考察を行っている。怒りの発露としての抗議運動、あるいは想像上の実際暴力の描写に着目し、ここに潜在する男性主体性を基軸にした対抗暴力の問題点を明らかにした。その上で、非暴力的対抗手段としての声、テキストの効力を再帰させる方策とは何か、あるいは怒りの発露がクィアな欲望とどのように結びつき現状を変えうるのか、を提起している。

同時に、これまでの強者としての米軍(基地)あるいは本土、弱者としての沖縄、といった構図を問い直しつつ、記録や証言から漏れてきた人々の声を想起、描出する手段としての文学の役割について考えている。それは、沖縄県民のみならず、県内で後景に置かれてきた台湾、コリアンなどの東アジアの人々をめぐる多層的な抑圧構造が、文学作品の中でいかにして想起されてきたのか、彼らが発してきた声を表現者はいかに聞き取ろうとしたのか／聞き取れなかったのかを明らかにし、沖縄戦から現代に至る足跡を多面化するものでもある。

さらに、これらの問題から視野を広げ、2000年代以降における「自己責任言説」、「歴史修正主義」、ジェンダー、クィアをめぐるバックラッシュ、社会運動へのバッシング、といった状況への抵抗手段としての文学、沖縄を中心とした東アジア文学圏におけるセクシュアリティと結びついた戦争・暴力・移動の記憶を想起する手段としての文学、クィアなセクシュアリティの発露の困難性と解決手段としての金銭に関する文学をめぐる研究といった課題にも取り組んでいる。

【主要業績】

- ・『〈怒り〉の文学化——近現代日本文学から〈沖縄〉を考える』春風社 2023年3月(単著)
- ・中川 成美、西 成彦他『旅する日本語: 方法としての外地巡礼』松籟社 2022年3月
(分担執筆、担当範囲:〈聞き受け〉つつも〈再生〉できない声—目取真俊「マーの見た空」論)
- ・「移民経験を聞く・想起する・書く作家——大城立裕「ノロエステ鉄道」論——」
『立命館言語文化研究』(第34巻第2号) 立命館大学国際言語文化研究所 2022年12月



提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	